

# 大陸（南支）

## 通信隊の大陸戦記

福島県 上野 久五郎

私は大正十一（一九二二）年七月十六日、農家の五男三女の長男として出生。家は田が主で米作り、畑は麦、大豆、そして養蚕をやっていた。

昭和十七（一九四二）年の兵隊検査で第一乙種で輜重兵で、第一補充兵でした。昭和十七年十一月十二日現役編入、十九日に赤紙召集がきて、福島県から三十人が神奈川県座間の東部第三十八部隊、中野電信第一連隊に十二月二日入隊しまし

た。

翌三日に面会許可、義兄と叔父が面会に来てくれました。隣には前日入隊されたばかりの根本軍曹がおられ、叔父と同じ会社の同僚と分かり、奇遇に話はずみませんでした。その後の根本軍曹の消息は判りません。

十二月四日夕方、兵舎を出発、小田原から軍用列車で下関へ、七日朝、釜山上陸、貨車輸送で朝鮮半島を北上中に十二月八日を迎え、大東亜戦争勃発を知らされ、車中で宮城を遥拝をしました。

十二月十二日、山海関通過、途中、班長から気合をかけられました。南京浦口から揚子江（長江）を遡航、船中で下士官ばかりの部隊と同乗しましたが、欠礼したとかで初年兵が下士官からビ

ンタの洗礼を受けました。班長から「内地から来たばかりの新兵で、敬礼の仕方教わってない状態なので何とぞ勘弁して欲しい」と謝ってもらい、一件落着いたこともありました。

漢口に十二月二十日着、郊外の漢水にある兵舎に入り、第十一軍通信教育隊で教育を受け、通信機器輸送班が四個班編成されました。

昭和十八年一月、江北作戦が開始され、それに実地教育として参加することになり、武昌の野戦病馬廠から馬を借りて作戦に参加しました。古兵は何かあったら「軍通信の兵隊です」と威張っていろと教えてくれました。約二カ月の作戦が終わりました。

続いて昭和十八年五月初旬から江南作戦が始まり、本部付の形で参加する筈でしたが、私が身体検査の結果マラリアの疑いがあるとのことで残留させられ、炊事の手伝いをさせられました。せっかく張り切って一日も早く実戦の体験をしたいと

思っていたので非常に残念でした。

当時、第二中隊本部は漢口の西にある孝感という街にあり、山本喜太郎という古参大尉が中隊長でした。

三八式騎兵銃が各人に交付されていましたが、作戦の時には分捕り品の英国製の小銃が渡されました。ズシリと重い銃で参りました。

機器輸送班は挽馬隊で、機材班所属の軍曹一人で七十人の兵隊を一つの内務班にまとめていましたので大変です。作戦時には三個班に分けられました。

配属された馬は内地馬ではなく、足の短い動きがのろい蒙古馬で、行動中敵機に襲われた時にはノロマで退避するのに気をもませられました。

昭和十九年六月、衡陽作戦が始まり、第一四師団に配属された時には、馬の蹄鉄を交換している最中に敵機が襲来し、緊急避難しましたが、兵一人と馬五頭が死ぬという損害が出ました。

引き続き宜昌作戦の時には第四十師団に配属され、昼間は空襲を避けて待機し、夜間は連続十時間も強行軍する、昼間は馬を樹の蔭に曳き入れ枝葉で馬体を隠し擬装に懸命でした。

昭和十九年十月、湘桂作戦が始まると、今度は第十一軍無線第五中隊の器材班として配属されました。班長が「上野ハガキが来てるぞ」と渡されたハガキは故郷の隣人からのもので、母が二月になくなったと知らせてくれたハガキでした。亡き母を偲び悲しい思いに暮れました。母の顔が浮かんで悲しくなりませんでした。

昭和二十年五月原隊に戻りましたが、原隊（第三中隊）は南支の第二十軍（桜集団）に配属になっていました。武器として重機関銃と迫撃砲を受領して、一カ月以上の徒歩行軍で昭和二十年三月に広東に到着、次いで深州に中隊本部を置き一個分隊だけが平湖という部落に送信所を開設し勤務することになりました。

私はそこに行く予定ではありませんでしたが、

予定していた兵隊が資材や糧秣を駅へ輸送中に事故を起こして負傷したため、私が代わりに送信所勤務になったのです。一個分隊です。終戦は深州で迎えました。

軍隊で一番苦勞と思ったのはビンタもそうですが、ビンタ以上に思うのは馬の取り扱いが一番苦勞の種でした。私は生来性質が穏やかで話もゆっくりにすからとても軍隊向きではありませんから進級も人よりおくれました。食物は司令部付きの兵隊だったので、作戦中は別として、駐屯中は一線部隊にくらべれば良い方だったと思います。

昭和十九年の作戦中に班長から一番上等の馬を与えられました。早速、鞍を付けましたが充分になじませなかったので鞍傷を作ってしまったのです。点検の時、班長に発見され「こら上野！ やったなあ！」と叱られ「すぐ冷せ」と命令されました。しまったと思えば夜も寝ずに毎日冷しましたら幸い早く治ったのでホッとしました。

班長から早速「上野よくやったな」とほめられました。それからはその馬のお陰で脚も早く、行軍も早く歩け、今までの悪い馬にくらべて格段にらくになりました。

また、ある作戦に出て馬を曳いて行軍中に道路が遮断されて、傍らの田圃が終わって舗装道路に出た時に、馬の蹄の音が四ツ鳴るのに三ツしか鳴らないのに気付いて調べたら、なんと一つが無いではありませんか。落蹄です。馬の蹄が痛んで歩けなくなりました。一大事です。私は田圃の中で落としたと直感して直ちに田圃の泥の中を手探り足探りで探しました。

みんなは、とても見つからないと思っていたようですが、私はなんとしても探してやると決意して、泥まみれになって田圃の中を這いずり廻り、遂に探し当てた時は本当にうれしかったです。班長も「上野よくやった。偉いぞ」と賞めてくれました。あの時の様子は今でもハッキリ思い出せます。

終戦になり部隊は香港防衛隊の配下になり、九竜に渡り、英軍の武装解除を受け、英軍の収容所にいれられました。

七〇頭の馬も英軍に引き渡されましたが、英軍司令部から馬の取り扱いに英兵が馴れるまで、日本兵三十人が残って馬扱いの教育をしてくれと頼まれ、私もその一員として残りました。

昭和二十一年八月、九竜で引揚船に乗艦、浦賀に上陸復員し、家に帰りました。

母が亡くなったのは戦地で知らされましたが、父も昭和十九年七月に、母のあとを追って他界していたのはショックでした。

姉は満鉄社員の嫁として新京に滞在していましたが、引揚列車に二人の子供を連れて乗る時に、混雑の中で一人がはぐれ、諦めていたところ、列車内で迷子の案内があり、無事に揃って帰国できたとの話を聞かされ「よかった」と思いました。

弟は私より早く満蒙开拓義勇軍に入り、三カ月の訓練を受けて満州に渡りましたが、義兄が満鉄

社員だった関係で兵隊にならず満鉄社員となり、昭和十九年十月に帰国していました。

## 河南作戦に病魔とも闘う

宮城県 松川 章 吾

六十有余年を経て、記憶も朧げな手にペンを執り、有りし日の戦跡を辿る。

想い起こせば、昭和十六（一九四一）年八月、二俣、飯野川、大谷地の合同徴兵検査が、中心地の飯野川実科女学校を会場として実施されました。その時は町の「中之茶屋」と言う旅館で規律正しい一泊二日の団体生活でした。

その際、簡単な筆記試験が実施され、審査の結果、成績優秀をもって、時の連隊区司令官東海林大佐殿より賞詞を賜わり喜んでいた所、小学校卒業にしては出来過ぎていると問題視されました。しかし調査の結果、その疑いが晴れてホッとしました。

想い出が頭に浮かびます。

体格については自慢できないので、諦めていた通り第一乙種合格となり、肩身の狭い思いで召集令状の来るのを一日千秋の思いで待ちました。待つこと久し、昭和十七年八月「赤紙」が来ました。ようやく一人前として認められたことが、昨日のこのように脳裡に焼き付いています。

出征当時の我が家は、国策の「生めよ殖やせよ」で兄弟姉妹十一人の長男に生まれました。部落には同じような家が四家族ありました。部は、その上財産もなく、借地住まいで、その日暮らしの日雇い家業で、文字通り「赤貧洗うが如し」の諺通りで、私の長雇い（一年中住み付いて働く）で生計を助けていました。このため後顧の憂いはあるものの親類や銃後の方々に後事を託し、近くの河川敷堤防の広場において部落を挙げたの壮行会を開催して頂きました。

阿部二俣村長様（私の長雇い主）よりのご祝辞